

ポラリスを仰ぐ北の大地から



流水とガリンコ号

紋別医師会 会長 小林 正司

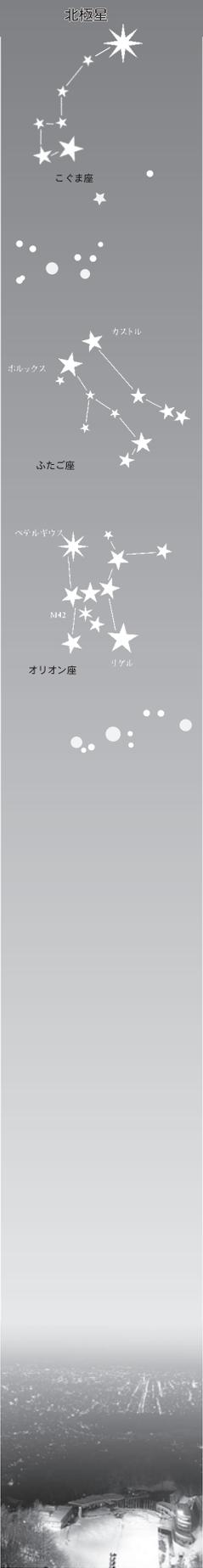
昔の流水は迫力があつた。見渡す限り氷の雪原である。岸边には流水が重なり合い、数メートルの高さの氷塊が1キロメートル以上も続いていた。「流水山脈」と呼ばれた。近年は地球温暖化のせいで、流水の面積も減少し接岸期間も短くなってきている。

流水が発生するのは北海道から約1,000キロメートル離れたロシアのアムール川の河口付近で、風に吹かれ海流に乗って成長しながらオホーツク沿岸に到達する。通常、1月中旬頃、沿岸から目視でき、1月下旬頃、接岸し風向きで接岸したり離れたたりし毎日のように変化する。移動の速い時は数時間で岸边にあったのが水平線まで遠ざかる。昔は厄介物と思われていた流水も科学的研究が進み、プランクトンを大量に運んできて魚介類への栄養資源となっていることも判明している。

この流水を観光に役立たせようと考えた人たちが砕氷船で氷海を突き進もうと建造したのが、ネジ型スクリューを船体前部に装備し氷を割って流水域を航行する「ガリンコ号」である。初代が1987年2月就航、39トン、全長25メートル、定員32名（翌年改造して70名）速力3ノット。全国的にも話題となり、流水観光の人気も出たため、1997年1月にガリンコ号Ⅱ就航、150トン、全長35メートル、定員195名、11ノット、夏期運航も開始。釣りもできる。2021年1月、ガリンコ号ⅢIMERU就航、3階建、366トン、全長46メートル、定員235名、16ノット。冬期は流水観光便、夏期はクルージング便、フィッシング便として就航しており、どちらも人気がある。

冬期に陸上から氷海を突き進むガリンコ号の濃いオレンジ色の船体が見えると、ガリガリと音を立てて進んでいるその船上で喜んでいる観光客の歓声まで聞こえてくるようで、遠くから見ているこちらまでが楽しくなる。

ぜひ一度、冬期のオホーツク観光（夏期も結構なものです）を経験されてみてください。



「守破離」と研修医制度

札幌医科大学医師会 会長 土橋 和文

医学生・保健医療学部生の「巣立ち」のときが近づきつつある。当該地区の医療者として気にしている数値がある。マッチングを経た初期臨床研修医数と後期研修医数／卒業数比率：それぞれの残留率です。例年、各時相では、道外出身者と積極的流出者と道外医育機関からのU/Iターン数は拮抗している。政府は上限（いわゆるシーリング）をかけるのに躍起だが個人の心情には逆効果、次第に全国各地と同様に関東・大阪圏への流出が顕著になっている。進路相談の学生には2つのことをお話しすることになっている。第一に将来の活動の場（地区と領域）をだいたい決めること。第二にロールモデルの発見と「守破離」の認識です。

特に初期研修期間は、医療者としての「型」を身に着ける、おそらく唯一無二の時期です。無論、「型」とは単に維持・踏襲するものではなく、改変・パラダイムシフトを繰り返し、やがて、真の「個」そして新たな「型」が確立される。経験的に医療者の「型」とは、場と人から形成される。型のない医療は単なる「型なし」、発展性・応力のない「マニュアル医療」である持続的発展は望めない。一方、良き「型破り」は大いに歓迎です。かつてより、個人の技量を「道」として追求する必要な分野では「型」の習熟度を定める慣習「守破離」がある。守（半人前）、破（1.5人前）、離（創造者）とされ、情報処理・外科研修に概念的に取り込まれてきたが基本は同じ。

医療は本質的に行動経済学の「スロー」と「ファスト」のせめぎ合いだ。私個人を含め卒前学生は手っ取り早く「ファスト」を身につけることが「型」を作ることだと誤認識している。基本的臨床力は「聞く・診る・語る」です。いま、大学附属病院では研修制度の大改革中だ。是非是非「型」を大事にしたいものだ。長々書いてしまいました。各方面のご助言をお願いいたします。